

國學院大學學術情報リポジトリ

挨拶(現代武道の人間開発力：
日本の身体文化から何を学ぶべきか)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新富, 康央 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001220

挨拶

新富康史

國學院大學人間開発学会会長、
國學院大學人間開発学部教授・同学部長

皆さんこんにちは。今回で人間開発学会は第三回大会となります。学部長が学会長を兼ねておりますので、学会長として一言、御挨拶させていただきます。

今回の演武とシンポジウムという企画に関しては先生方、皆さんのほうから大分声が上がっております。國學院にきて五年目になりますが、そういう意味では國學院に来たんだなど、改めてそんな気持ちに浸っております。

長いことはいませんが、弓道の山田先生、柔道の上口先生、上口先生は静かな方で自分からはおっしゃいませんが、モスクワオリンピックの候補選手だった方です。菊池君、奥谷君、それから内田さん、永清さん、職員の方ですね。それから空手道の藤田先生。それから剣道のほうにいきますと、植原先生、そしてアレキサンダー・ベネット先生、それから阿部先生。そして居合道では、今日ご講演いただきます中村哲先生。それぞれお一人お一人、お礼を申し上げたいと思います。静寂の中の緊張感、そういうものを久々に感じさせていただけます。

私が先生方の武道を見させていただいた時に、なぜかふと先日出張で行きました、福岡市宮崎宮の額縁の文言を思い出しました。「敵国降伏」という文言です。これは元寇の役の時に書かれた言葉で、多くの皆さんは敵国をやっつけるのだ、降伏さ

せるのだ。このように読む方が多いと思います。しかし漢文に詳しい方だったらおわかりと思いますが、その場合は敵国を降伏させるわけですから「降伏敵国」ですよ。これが「敵国降伏」つまり、敵国が降伏してくる。何によってかと申しますと、戦って勝つ、やっつけるというのでは無いのです。日本の精神文化というものに触れて、その敬意と文化力というか精神的な高さ、そういうものに傾倒して、敵国はひれ伏す。そういう意味がこの言葉に入っております。まさに私は今日の武道を見ている中で、勝つとかやっつけるということではなくて、相手が敬意を払う。そして尊敬し、それによってひれ伏す。そういうものとして武道というものがあつたんだという、伝統文化と武道の関係につきまして、私なりにそのような印象を感じさせていただきました。本当に武道の奥深さといえますか、そういったものを感じ取らせていただいたと思います。

この人間開発学会というのは、他の学会と異色であります。なぜかと言いますと、親学会というものを持っておりません。まさに私たちが作っている学会です。積み上げているわけですから進行形です。人間開発学というものが既に今あるわけではあります。しかし人間開発学というものを作り上げたい、構築したいということ、発展的に積み上げてやっています。一年生の学生諸君もいますので、簡単に概略を述べますと、第一回学会の時は本学部の教員それぞれの分野で人間開発という視点で何ができるか、どんな学問構築ができるかどうかということについて探り合うことにいたしました。そして二年目は、安野先生を中心といたしまして、本学部の一つの柱であります、伝統文化という視点から、私たちに何ができるだろうか、それと人

間開発との関係について考えて参りました。そして、今年はさらに積み上げて、特に伝統文化の中の武道との関係におきまして、人間開発という学問とどのように関わり得るのかということ、「現代武道の人間開発力」というテーマで行うこととなりました。伝統文化の上になつております武道の現代的解釈ですね。まさに「現代に問われる伝統文化の意味」、というように言つて良いのではないかなと思つております。

実は昨日、今日講師で来ていただいております、中村哲先生が博報賞（※）というものを受賞されましたので、ちょっと拍手をお願いします。

（拍手）

中村先生の行われたことが何かといますと、今、大震災というもの、三・一一というものがあつて、我々は復興に取り組んでいます。その復興のエネルギーを何からもつていったらいいのか。先生は地域復興とか活力創生のためのエネルギー創造として、伝統文化、和文化というものを向けられたわけです。具体的には皆さんテレビのニュースなどで、東北各地でこのほりが上がつている映像を観られた方もいるかと思ひますが、「鯉のぼり」活動という形で、行われたのですね。さらには、日本だけでなく中国やベトナム・ラオス、そういうところまで日本の文化を伝えよう、そういうことをされております。まさにこれは、私たちの人間開発学の構築と、軌を一にされているというふうに考えております。

そして人間開発学のもう一つの特徴は、教育理念自体を学問

化する、科学化するという、これも、今までにない挑戦だと思います。どちらかといいますと学者の世界では教育と研究のどちらを採るのかという、二者択一的な発想をする方が多いのですが、我々はそうではなくて、教育そのものを研究によつて提示する。「人間開発」という、教育力をどう高めていくかということ、を学問化するという、日本でも、そして世界でもまれな学会だと思つております。将来一〇年後、二〇年後に向けて、さらに伸びていかなければならないと思つております。

そういう意味で本日は第一部に、演武というものを取り入れて、そして第二部の公開シンポにつなげるという。これは普通の学会では出てこない、わが学会らしい発想だと思つております。ここでもう一人拍手をしていただきたいのですが、このアイデア・構想を練り上げられたのが、ここに立つておられます、藤田大誠先生。この先生にも拍手お願いいたします。

（拍手）

これを持ちまして、簡単ではございますが、学会長の挨拶とさせていただきますと思います。どうもありがとうございます。

※中村哲氏が理事長を務める和文化教育研究交流協会の『天空へ向けて舞い揚げよう「鯉のぼり」活動』が、第四十二回博報賞日本文化理解教育部門の受賞を受けた。詳細は博報財団ホームページ (<http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/>)。